

10月にボートレースからついで開催された「ファン感謝3Daysボートレースバトルトーナメント」の取材に行ってきた。最近、ボートの出張で痛感するのがホテル代の高騰。今回は3連休で開催される上に佐賀県では国スポ(昔の国体)が開催中。ダブルパンチで宿がなかった。何とか確保できたホテルも相場の倍。では、博多まで足を延ばせばとも考えが、唐津よりもつと高かった。

大会自体も前検からバタバタだった。欠場が相次ぎ、選手が集まらない。直前に白井英治が欠場。追加選手を探したが結局見つからず(この大会の出場選手はA1、A2に限られるため)、47人スタートとなってしまった。結局、追加参戦の山崎裕司が初日トーナメントを2回走ることに。前半の5Rは権利なしの状態。後半9Rのみ勝ち上がりの権利が発生する。初日の予選1走目から賞典除外の選手が走っているようなもので、買いにくいし縮まらない。

また、今回初めて知ったが、追加参戦の選手は正規あつせんを選

手より選考順位が下になってしまふのだ。今回は24年後期の適用勝率が選考順位になった。本来ならA1級の吉川元浩の選考順位は上位のはずだが、追加参戦だったため、一気に最下位に(追加選手同士で争う場合は勝率上位が適用される)。「えっ? て思った。こんなん知ってたら(追加を)受けていなかったと思う」とぼやいた。

枠番は抽選なのだから、選考順位は関係ないと思うかもしれない。しかし2日目の復活戦の1着選手や、セミファイナルの2着選手は、初日トーナメントの着順が同じだった場合、選考順位が上の選手が勝ち上がる。その点で追加選手は不利と言わざるを得ない。このルールを知った選手は、来年、追加あつせんの話が来た際、受けるだろうか? 記者が選手だったとすれば、まず受けない。

また、データ上、不参加や出場取り消しの手続きを行った選手は5人だったが、あらかじめ日程上に予定を入れておけば、あつせんを回避することができる。その手続きを行っていた選手も相当数い

たのではないか。来年の三国大会出場選手が集まるのか、早くも不安になってきた。

なぜ、出場を嫌がるのか、それは賞金が安いからだ。優勝賞金は158万円で副賞は金1000グラムと豪華だが、あくまでも一般戦。優出できなかった選手の手取りは微々たるものだ。しかも相手はSGクラス。普通の一般戦を走っていればしっかりと稼げるのだから、走りたくはないだろう。

しかし、グレードをGIIにすれば話は変わってくる。優勝すれば来年のクラシックに出場できるし、500万円近い優勝賞金もある。チャレンジカップの選考期間(10月末)も迫っており、トップ選手にも無視できない大会になるだろう。さらに一般戦の1着賞金を30万円に引き上げ、参加手当も100万円に増額(最終日までいれどもらえる)すれば、出場を辞退する選手も減り、追加の要請も喜んで受けるはず(もちろん追加選手の選考順位も適切に扱う)。トーナメントがダメだったから帰郷するという選手も減るはずだ。

また、ネットで多く見かけたのが「どこがファン感謝?」という意見。開催中は全国のレース場やボートチケットショップなどでイベントが行われたが、舟券ファンの望みはキャッシュバックに尽きるだろう。ファン感謝3Daysの舟券をテレボートで節間1000円以上買ったファン10万人に1万円が当たる(総額10億円)ぐらいの、儲け度外視のキャンペーンをやった方がいい。年に一度の大感謝祭。これならば、舟券を買ったことがなかった人も宝くじ気分で購入してくれるに違いない。

トーナメントの勝利者インタビューなどで、選手がお年玉的な現金をもらい、カメラの前で披露していたが、一体誰が喜ぶのか。大多数のファンは「どこがファン感謝やねん。選手感謝の間違いちゃうか」と思っているはずだ。勝利者インタビューで現金を渡すくらいなら、全体の賞金を上げた方がいい。そして、ファンへのキャッシュバックは手厚く。売り上げ絶対調のボートレース業界のファン感謝の本気度を見せてほしい。

艇言

報知新聞

藤原邦充

藤原邦充(ふじわら・くにみつ)
1974年生まれ 50歳

香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース(1年だけ)、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になって観音寺競輪を取材することが夢だったが、無念の廃止に。